

## 村野家（天神前）の民具 —その2—

柳窪にある村野家（屋号・天神前）は、茅葺屋根の主屋をはじめ敷地内の建物7件が国の登録有形文化財となっています。その村野家の主屋・土蔵（裏の蔵）・穀蔵・新蔵・北の納屋に収蔵されている民具の調査を、平成28・29年度の2か年にわたり、市文化財保護審議会委員の宮本八恵子先生に依頼し、433点の民具を確認しました。1点には1対・1組・1式・1揃といった複数の集合体も多いため、それらを個別に数えると1,000点近くにのぼると思われます。こうした膨大な民具は、村野家が歩んできた長い歴史の中で、時代に<sup>なりわい</sup>応じて変化してきた生業や衣食住などの暮らしを物語るものです。宮本先生に寄稿いただき、今号では「養蚕・製糸<sup>かすりじま</sup>・飛白縞製作用具」、次号では「結婚式に関わる民具と文字資料」を紹介します。

### 1. 明治時代の村野家の生業

村野家（屋号・天神前）は、天保7年(1836)に分家したのち、その初代となる村野七次郎（文化10年～明治11年）から二代目七次郎（天保12年～明治34年）にかけて肥料商を営み、<sup>ぬか</sup>糠を中心とする農業用肥料を商いました。村野家の屋敷には、かつて商品の糠を貯蔵する「糠蔵」もあったのです。二代目七次郎の時代には、肥料商に加えて<sup>いとまゆ</sup>糸繭商も営みました。幕末の開港以来、国産の繭や生糸は輸出品目の主要な位置を占め、その需要がとて高かったのです。また、明治時代には輸入綿糸の到来によって綿織物の生産も盛んとなり、東京都側の旧多摩郡から埼玉県側の旧入間郡にまたがる狭山丘陵では、「村山緋」「所沢緋」と称される木綿の飛白縞が隆盛を極めました。二代目七次郎は糸繭商のみならず、飛白縞の買継商や製造にも仕事の幅を広げていったのです。このように、村野家は常に時代の動向を見据えつつ、時代に即応する生業を展開させていきました。

### 2. 糸繭商時代を語る民具

**繭の熱殺器** 村野家では養蚕は行われていませんでしたが、糸繭商を営んでいた時代には買い集めた繭を一時保管し、相場の高い時期を狙って繭問屋や製糸会社に売りました。繭は、生の状態で保管しておく<sup>さなぎ</sup>と蛹が羽化して繭を食い破ってしま



【写真1】熱殺器

います。そこで、【写真1】の熱殺器を使い、高温の熱と蒸気で蛹を殺しました。熱殺器の内部には鉄板で仕切りが設けられており、箱の底には熱を取り入れる穴、蓋には熱抜きの穴が空いています。この中に繭を入れ、湯を沸かした大釜にのせて底の穴から内部へと熱を送り込んだのです。箱の側面には、「改良 繭蛹熱殺器 製造販賣所 東京市本郷三丁目十八番地 発明者 御法川直三郎」「専売特許第六二八号 明治二十二年三月ヨリ向十五年間」と刻印された真鍮板の商標が貼られており、併せて、「特約 製造販賣所 所沢町 坪川新兵衛」の焼印が押されています。明治35年(1902)の『埼玉懸営業便覧』を見ると、「坪川新兵衛」の店舗は所沢町の下仲町にあり、ここは現在の所沢市寿町にあたります。

**製糸用具** 繭から生糸<sup>きいと</sup>を取るには、繭を煮てその表面を小箒や箸で突き、糸口を出します。そして、複数の繭から出た生糸を1本にまとめて引いていくのです。繭の表面からはフトリあるいはシケイトとも呼ばれる太く硬い熨斗糸<sup>のしいと</sup>が出るので、まず、これを六角棒木の糸枠【写真2】に絡め取り、続いて、細く平らな生糸が出てくると、これを座繰り【写真3】の小枠に巻き取ります。そして、小枠からさらに総枠<sup>かせ</sup>【写真4】に巻き返し、生糸の総を作るのです。村野家には、部品に欠損こそあるものの、百回しと呼ばれる改良型の総枠も保管されていました。百回しは、内部に仕込まれた歯車によって枠が100回転するたびに鐘が鳴ります。したがって、長さや目方の一定した総をつくることができます。

このような製糸用具から、村野家では買い集めた繭を売るほかに人手を雇って糸繰りを行い、生糸の総を出荷していたことがうかがえます。



【写真2】熨斗糸を巻き取る糸枠



【写真3】座繰り



【写真4】総枠

**飛白縞の買継商と製造** 村野家では、繭や生糸と共に飛白縞の買継商を営み、併せて、飛白縞の製造も行っていたことが民具からわかってきました。飛白縞は、紺地に白い文様を織り出した木綿<sup>かすり</sup>の紺縞<sup>かすり</sup>で、旧多摩郡の村山地方を発祥地とすることから「村山縞」、その取引市場が所沢であったことから集散地の名を冠して「所沢縞」とも呼ばれ、明治時代中期から後期にかけて右肩上がりに売り上げを伸ばしました。そして、明治39年(1906)には年産120万反を突破し、全盛期を迎えるのです。当時の生産地は狭山丘陵のみならず、清瀬・小平・小金井・保谷・田無・国分寺・立川・三鷹など東京府下にも広がりました。柳窪も、その域に含まれていたことは想像に難くありません。生産者の機屋<sup>はたや</sup>では、ツボ出しと称して周辺の家々に賃機織りの内職を託し、高まる需要に応えるべく生産量の向上を目指しました。

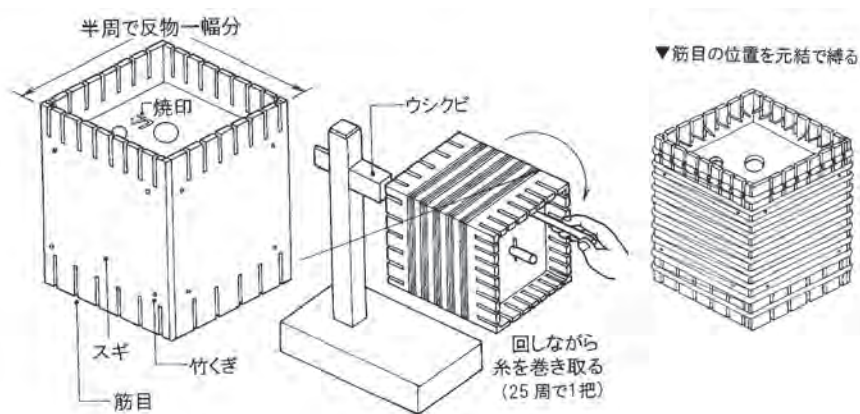


【写真5】縞糸とそれを織り込む杼

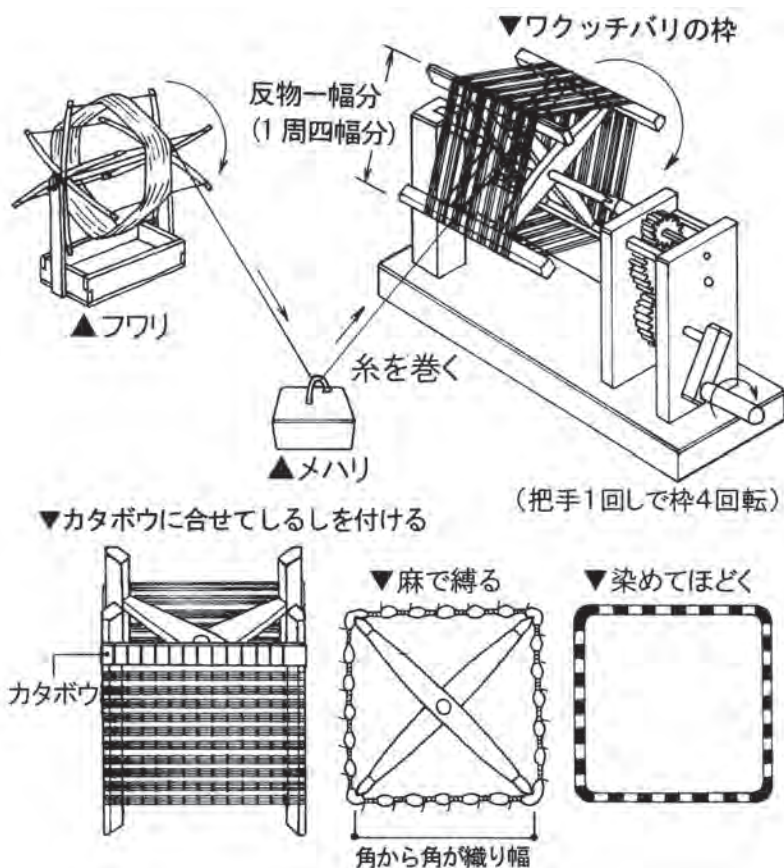
村野家には、緋糸を作るための枠や緋糸を織り込む<sup>ひ</sup>杼【写真5】、及び、織り残した緋糸の紐が保管されています。緋糸作りに用いられる枠は2種類あり、古いものが【写真6】のようなハコワク(箱枠)です。ハコワクの縁には規則正しい筋目が切られており、枠に巻いた綿糸を筋目の位置に合わせて紙縫<sup>こより</sup>や元結<sup>もとゆい</sup>で縛ると、その部分が白く染め抜かれて緋糸ができるのです【図1】。また、明治20年代末期に子どもや女性向けとする大柄・中柄の需要が増えると、ワクッチバリ(枠縛り)と呼ばれる【写真7】のような四本枠木の枠が導入され、これをカタボウ(型棒)と呼ばれる定規と併用することでさまざまな緋糸が作られるようになりました【図2】。ワクッチバリの枠と【写真4】の総杼を見比べてください。同じような形ですが、よく見ると総杼は枠木の角が丸いカーブを描いており、ワクッチバリの枠は角がとがっています。理由は、角から角の寸法が反物の織り幅となるためです。角を基点にカタボウを当てて墨でしるしを付け、その部分を縛ることで、反物一幅にピタリと合う正確な緋糸ができたのです。



【写真6】 ハコワク



【図1】 ハコワクを用いた緋糸作り



【図2】 ワクッチバリの枠を用いた緋糸作り



【写真7】 ワクッチバリの枠

こうした緋糸作りの杵を所有できるのは、機屋に限られていました。機屋は緋の文様をデザインし、それに合わせて緋糸を作り、織り手に製織を託します。したがって、賃機織りには必要のない道具なのです。では、どうして村野家が所有していたのでしょうか。おそらく、村野家は飛白縞の買継商と機屋を兼ね、自らも緋糸を製造して周囲の農家に賃機織りを託していたと考えられます。飛白縞の柄行は、当初は男性及び中老年向けの小柄が主体であり、その緋糸はハコワクを用いて作られました。そして、大柄・中柄の需要が増えると、ワクッチバリの杵を導入してそれに対応したのです。

### 3. 時代を映す村野家の商い

**村のコンビニエンスストア** 肥料商に始まり、糸繭商、飛白縞の買継商、そして機屋と、村野家の生業はいずれも時代の趨勢を映すものであり、残された民具が当時のようすを今に伝えてくれます。

明治から時代は下りますが、村野家の商いとして忘れてはならないものに「山春商店」があります。

昭和37年(1962)、四代目七次郎の妻ハル(明治41年生)は、屋敷東側の現在茶畑となっている場所にたばこや日用雑貨、食料品を販売する「山春商店」を開業しました【写真8】。柳窪に商店がなかったため、たばこ好きだったハルは、遠くまで買いに行かずともたばこを吸えるよう自ら販売しようと思立ち、店を始めたそうです。取り扱う商品は、たばこのみならず客の求めに応じて次々とその種類が増えていき、当時の棚卸帳を見ると、たばこ・マッチ・ライター・ライター油をはじめ、箸・箸箱・爪楊枝・スプーン・東子・爪切り・剃刀・電池・ゴム・歯磨き粉などの日用雑貨、食料品ではチューインガム・飴・チョコレートなどの菓子、牛乳・バター・マーガリン・チーズなどの乳製品、香辛料のワサビや七味唐辛子、果物、コロッケなどの総菜、そして、当時はまだ珍しかったコーヒーやインスタントラーメンまで多種多様な商品が名を連ねています。「山春商店」は、まさに村のコンビニエンスストアとしての役割を果たしていたのです。しかし、昭和43年(1968)には隣町に滝山団地が建設され、客足は団地内に出来たスーパーマーケットに流れる傾向となりました。ハルはその現実を受け止め、「山春商店」を閉じたのです。

**山春商店の帳簿や事務用品** 村野家には、ハルが「山春商店」を営んでいた時代に使用した事務机や事務用品、仕入れや売上の帳簿及び棚卸帳が保管されています。また、事務机の抽斗に納められた漆塗りの文箱からは多数の貴重な古写真が発見されました。



【写真8】山春商店(昭和41年6月24日撮影)

(宮本 八恵子 東久留米市文化財保護審議会委員)

〔編集〕東久留米市郷土資料室(教育委員会生涯学習課文化財係)

〒203 - 0033

東京都東久留米市滝山4-3-14 東久留米市わくわく健康プラザ内

電話 042 - 472 - 0051 FAX 042 - 472 - 0057 \*無断転載はしないでください。